

人は人によって動かされる

枝木美香 / えだき・みか
特定非営利活動法人アークス仏教国際協力ネットワーク事務局長



親

しくしているお坊さんの一人といつものようにおしゃべりをしていた時、彼が湾岸戦争の時に、渋谷駅前でおこなったハンガーストライキの話題になった。彼が所属している教団の僧侶一人と信者の方一人が、開戦した1月17日からしばらく座り込んだが、2月に入って続ける人がいなくなったために彼が引き継いだという。週間、彼は一人でハンストを継続した。

よく身体が持ちましたね、という、長期戦になると見込んで梅湯を一日一杯ほど飲んでいたら大丈夫だったとのこと。水分と塩分さえ取れば、人はかなりの間、生き延びることができるものなのだ。とはいえ、後半になると体力の低下は顕著になり、歩行するのがやっとだったらしい。

「お経を唱えながら座っていただけで、お皿を置いていたわけでもないし、お願い文を貼っておいたわけでもないんだけど、全部で30万円以上集まったんだよ。私の前に2人が座っていたときは50万円以上集まったはずだったな」。

私は、妙にこのことに感心した。これこそがお布施だろうなとも思った。尊いことをしている姿を見たときに、それが自分にはできないと思うことであれば尚更、人は「ありがたい」という思いと、そこに何か寄与したいという思いに、心を突き動かされるのだろう。

当時、米国にいた私は、「Gulf Crisis」が「Gulf War」に変わりゆくなか、いわゆるリベラル派を標榜する人たちがさえ、「フセインの独裁を倒すための戦争は正しい」と戦争を肯定していた姿を見ていた。湾岸戦争勃発のころ、世論はむしろ戦争を支持していたのだらう。それでも、反戦を願い座り続けていた姿に、心を動かされた人たちは少なからずいた。

座っていたのがお坊さんだったからなのかもしれない。しかし、この人を支えたい、自分ではできないけどお願いします、という気持ちには、良くも悪くもその人の姿から発する力に押し出される時があるのだと思う。正義が悪かの判断を超えたところで、人は人によって動かされる。怖いことだ、とも言える。

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 28 2015.05.01

- 02 Relay Essay ポコポコ 28 人は人によって動かされる ◎ 枝木美香
- 03 [特集] **パプアと日本をつなぐカカオの物語**
先住民族の暮らしと自然を守る挑戦 ◎ 津留歴史
「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップ、展開中! ◎ 野川未央
- 08 [Topics] どんなに情勢が厳しくとも私は人間の力を信じたい ◎ きむきかん
『みんなでつくるシリア展』に寄せて ◎ 田村佳子
- 10 [Column] Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記⑩ デムタの森から世界とつながる ◎ 津留歴史
マニラ・ジープニー通勤④ ジープニーの中の小さな親切◎ 小川二美子
ロサエの歌が聴こえる④ BALIBO ◎ 野川未央
美味しいマンガ④ 『あさめしまえ』◎ 安藤丈将
- 12 わたしの友産友消じまん④ 桜の山農場の巻◎ 石岡真由海
- 13 APLA食堂⑥ ふるふるコーヒーゼリー◎ 大久保ふみ、廣瀬康代
- 14 [Voice from APLA partners] 【東ティモールより】地域の水源を守る
【フィリピンより】台風ヨランダ支援から1年が経って
- 15 事務局だよ

表紙のことば

クロマーとは、カンボジアの人びとの生活に深く根付いている万能の布です。主にコットンの手織布、日本の手拭いと同ような使い方をします。私には、男性が頭に巻いているのが印象的でした。

初めてカンボジアを訪問したのは10年前の11月。雨期が終わって水が豊かな時期でした。シェムリアップからバタンバンまで、トンレサップ湖をボートで移動しました。生活のすべてが湖の上。通学や買い物、物売りの往来、そしてトイレも船です。衝撃だったのが、家畜(鶏・豚)も湖の上の小屋にいたことでした。お天気とてもよい日で、きらきら光る湖の木々の間を、小さなボートでドキドキしながら渡ったのを思い出します。(廣瀬康代)

パプアと日本をつなぐカカオの物語

日本から、飛行機を乗り継ぐこと丸一日半。赤道直下の世界で2番目に大きな島、ニューギニア島。この島の西半分が今号の特集の舞台「インドネシア領パプア」である。

パプアの大自然と暮らしを守る先住民族が大切に育てたカカオが多くの人びとの手を経て、日本に届けられる民衆交易が開始されて今年で3年目に入った。「チョコレートパプア」と銘打ったパプアの熱帯森を彷彿させるカラフルなパッケージの板チョコには、上からの開発に抵抗し、自然と文化を守るために奮闘する先住民族の熱い思いが込められ、パプアから届いたカカオに思いを馳せながらチョコレート作りを楽しむ日本各地の人びとは、地域と世界をつなぐ想像力をもった。今号は、パプアと日本をつなぐカカオの物語を特集する。

(編集部)



原生林の中で大きく実ったカカオ。

先住民族の暮らしと自然を守る挑戦

津留歴史 / つる・あき
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員

ア系先住民族が氏族グループで生活共同体を形成し、狩猟、採集、漁労、農耕などを営みながら住んでいたころです。そこには国家

の領土と勝手に決まっていた。ちなみに「ニューギニア」や「パプア」という名称も外の人間が勝手につけた名前でした。ニューギニア島は1545年、スペインの探検家がこの島に上陸したときに、現地の住民が西アフリカのギニア人に似ていたことから、「ニューギニア」と名付けました。パプア

はマレー語で「縮れ毛」を意味する「プア・プア」からきています。メラネシア系に属するパプア人は

パプアと聞くと、「パプア・ニューギニア」と思われる方も多いいのではないのでしょうか。ここで話すパプアは、ニューギニア島の西半分を占めるインドネシア領パプアのことです。とはいえ、もともとニューギニア島はメラネシ

部をドイツ、東側南部をイギリス

も国境線もありませんでした。ところが1885年に当時の列強オランダ、ドイツ、イギリスが世界で2番目に大きなこの島を東経141度線で真っ直ぐ東西二つに分断し、西側をオランダに、東側北部をドイツ、東側南部をイギリス

縮れ毛と長くカールしたまつ毛が身体的特徴です。「パプア」と言われると縮れ毛をバカにされているようで嫌な気持ちだった」という話を、オランダ時代を生き延びた女性の女性から聞いたことがあります。が、今やニューギニア島西半分に住む先住民族は「我はパプア人なり」と胸をはって言うようになりました。

1969年、西側のオランダ領は冷戦下の政治駆け引きの末インドネシアに併合され、そこに住む



収穫したカカオの豆を運ぶ女性たち。



カカオ豆を品質チェックして計量する買付けの現場。

先住民族の人びとは、ある日突然「インドネシア国民」になってしまったのです。インドネシアの統治下に入ってからパプア先住民族の運命は翻弄され続けます。日本の国土とほぼ同じ面積のパプアですが、人口はインドネシア各地からの移住民をあわせても300万人程度。土地の大部分が手つかずの自然のままであるパプアは、貴重な資源の宝庫であり、この資源目当ての開発が外部から容赦なく押し寄せるようになりました。1970年からパプアの中央山岳地帯で開始された米国系鉱山会社フリーポートによる金と銅の鉱山事業を皮切りに、国際石油資本BP（ブリティッシュ・ペトロリアム）による世界最大のマングローブ地帯ビントゥニ湾での天然ガス開発、森林伐採、大規模な油ヤシ農園開発など、地元の先住民族の生存を脅かす環境破壊や人権侵害を伴う開発の例は枚挙にいとまがありません。そして当然のことながら、パプアの人びとは伝統的な暮らしと土地を奪う開発に抵抗し、自分たちの生活を守る闘いを続けています。ここでお話しする挑戦は、パプアの先住民族の人

「顔が見えすぎる!」現場から届くチョコ

た方が、生産者がより多くの現金収入を手にとれると考えたからです。カカオ・キタでは、インドネシア政府が認定したカカオ品質基準に沿った買付けによって品質の良いカカオ豆を買い、「パプアのチョコは美味しい」という評判を日本で得られるようにしたいと思われました。このため、生産者から豆を買う時は品質チェックをさせてもらうことが前提です。品質により買付値段を変えたいのです。しかし、これがなかなか難しいこと

でした。生産者の中には買付ける前に豆の品質を調べようとすると、「そんなことをせずに早く計量しろよ!」と怒る人もいます。カカオ・キタのスタッフも負けずに「わたしたちは美味しいチョコレートにする豆を買いんだから、品質をチェックするのは当然ですよ!」と切り返します。また中には「天候のせいで乾燥が上手くいかなかったんだ。自分が怠けていたせいじゃないから買ってよ」と泣きつく人もいて、村での豆の売り買いは生産者の「顔が見えすぎる!」現場です。カカオ・キタが豆の品質を求めていることに戸惑う生産者がいること

の背景には、従来の買付人であるジャワやマカッサルの商人が、カカオの質にはこだわらず、一律同じ価格で買付けていることがあります。このため、より良いカカオを生産しようという動機も起きないというのが現状でした。これに対しカカオ・キタと協働するATIJでは、「パプア産カカオ」を打ち出し、最終製品のパッケージに「PAPUA」の文字が刻印されたチョコレートを作っています。日本で販売されているパプア・チョコを産地へ持つていくと、生産者はとても喜んでくれます。今までは仲買人へ豆を売った時点で目の前から消えて行く先も知らぬカカオ、ところがカカオ・キタに売るとそれが最終製品になって自分たちのものに帰ってくるのだ、というところがパプアの人には特別な意味をもつようです。最近では、日本での「原料であるカカオからチョコレートを作る」ワークシヨップに触発されたカカオ・キタのスタッフが、カ



パプアには伝統的にカカオを食べる文化はなかった。初めてチョコ作りを体験するベラップ村の人びと。

カオを買付けている村でチョコレート作りのデモンストレーションをして好評を博しています。こうして自分たちのカカオが美味しくチョコレートになることを知れば、生産に喜びと誇りを感じ、カカオ畑の手入れに精を出す動機付けになるのではと、カカオ・キタのスタッフは期待しています。

狩猟採集民族のカカオ栽培

「パプア人は豊かな自然に甘やかされている」と良く言われます。これはパプアでは食うに困らない、という事です。パプアの森や海や川が必要な食糧を無償で与えてくれます。飢える心配がないとい

びとが自らの暮らしと土地をして自然を守る闘いのストーリーなのです。

先住民族社会を無力化する開発に抗して

先住民族社会を無力化する開発に抗して

自然の中で、独自の慣習法と文化を持って自立的に生きてきました。しかし、開発と新しい生活様式を伴う変化が外部から押し寄せたことで、伝統的先住民族社会はそれに直面しながら生存し続ける道を模索しなければならなくなったのです。援助という形でパプアの村々にもたらされる開発は、住民のファイティングスピリット（頑張る力）を無力化することにつながると私は見てきました。人びとは与えられることに依存するようになります。援助のパラマキは、人びとの潜在能力と頑張る力を削ぎ、自分たちの力で自立するという誇りを奪っています。

「カカオ・キタ」事業のはじまり

こうして援助ではなく、モノを媒介とした継続的な経済活動を通してパプアの人びとと連帯するカカオ事業が本格的にはじまったのは2012年のことでした。

まずデッキーさんを代表とする「カカオ・キタ」、インドネシア語で「わたしたちのカカオ」という事業体を現地に立ち上げました。カカオ・キタは当初、カカオを生産する村の青年を雇い、連日トラックで山間部にある村々を回り、住民から直接カカオの濡れ豆を買付け、その豆を町にレンタルした加工場で発酵・乾燥させ出荷するという一連の作業を毎日繰り返しました。単純労働ではありませんが、毎日時間に縛られて仕事をするということは今までのパプア人の生活にはなかったことで、最初のうちは彼ら自身も戸惑ったようです。しかし加工場で全員寝食共にしながら生活するなかで、徐々に仕事のリズムに順応していき、筋骨たくましい若者たちは炎天下でカカオ豆の乾燥作業、発酵箱の濡れ豆をかき回す作業などを何が面白いのかキャッキヤツと奇声をあげ、冗談を飛ばしあいながらこなしていました。

2014年からは、生産者が村で発酵・乾燥させたカカオ豆を買付ける方法に転換しました。町のレンタル加工場で行う発酵・乾燥の作業コストを生産者側に移転し



先住民族の誇りを説くデッキーさん。

材料のカカオマスとココアバターを刻む
(2015年1月、東京都杉並区にて)。



初回のワークショップに大きな手応えを感じた私たち。2013年の秋冬には、全国キャラバンと題し、西は広島から北は山形まで、つながりのある方たちを訪ねて6都県13カ所でワークショップを開催しました。

2年間で800人が参加した 大人気企画

ワークショップを開催したのが2013年1月のこと。あつという間に定員を超える申込みがあり、原料からのチョコレート作りがもつ『可能性』を感じました。これまでは、民衆交易がもつストーリーや産地を取り巻く状況を伝えようと思っても、写真や映像を使用しての学習会という形では、関心を持って集まってくれる方の数は限られたものだったからです。

たとえば、広島県尾道市では、民家の居間を会場に、小さな子どもたちも一緒にワイワイ楽しく作業し、山形県白鷹町では、大人子どもあわせて総勢50人(↓)という大所帯でのワークショップとなりました。冬の上であつという間に固まりました。どの会場でもチョコレートづくりを始める前に、参加者のみなさんに焙煎したカカオ豆や原料のカカオマスを味見してもらいます。色や形はチョコレートそのもののものに、舌が感じる苦味や酸味にドキッとすることが多数。その後、刻んで溶かしたココアバターとカカオマスに、市販の粉砂糖と粉乳を入れてミルクチョコレートと、フィリピンのマスコバド糖だけを加えてビターチョコレートを作りますが、ほとんどの人から「こんなに沢山入るの!？」と驚きの声があります。チョコレートのは、砂糖の甘さだということを実感できる瞬間です。

初年度は、日ごろから民衆交易の商品を取り扱ってくださっているお店の方が主催してくるケースが多く、そうした場所には特に関心が高い方が多く集まるのでしょうか、チョコレートとを固めている間にお話しているカカオ産地で起こっている児童労働などの問題やパプアの状況についても、皆さんが真摯に耳を傾けてくれました。

Workshop of Handmade chocolate "genuine"

そして2年目の2014年度。噂を聞きつけた方たちからお声がかかることも増え、福岡、香川、兵庫、大阪、愛知、岐阜、福井、神奈川、東京、埼玉、福島、北海道と全国を行動し、合計30カ所ですべて530人もの方たちに、カカオの魅力やチョコレートという身近なお菓子の裏側にいるストーリーと出会ってもらうことができました。

印象的だったのは、どの会場でも一緒にチョコレートを作るという協同作業を通じて参加者の方たち同士が、一気に近くなる様子です。また、これまでAPLAや民衆交易のことを知らなかった方が通販で買い物をしてもらえるようになったり、チョコレート以外の活動にも興味をもってくれるようになったり、と新たな出会いもいただきました。

また、ある時に吉田シェフのアイデアから生まれた「ご当地チョコレート」には、どの地域の人たちも大盛り上がり。自分たちの地域ならではの特産品をチョコレートとあわせてみる楽しさ&美味しさに多くの人が虜になりました。たとえば、長野の林檎や花豆、山形の干し柿、広島の山羊ミルク(主催者の方たちが飼っている山羊のお乳をいただきました)、北海道のブルーベリーなどなど、忘れられな

人の手を経てたどり着く 地球の恵

「地球には、様々な問題があります。自分が気づいているか、いないかの違いです。今まで、美味しいと思って食べていたチョコレート、フェアトレードだから、良いチョコレートだから……。でも、実際の作業を経ると、もともとは地球の恵みである植物であり、栽培過程があり、国には歴史があり、人が暮らし、子どもが暮らし、資源を求め、一つの道と考える人々がいて……。そして一つ一つの段階を経て、いろんな人の手を経て、長い工程を経て、そしてヒナタヤにたどり着いたチョコレートがお客様の手に渡っていく。嬉しい瞬間ですよ。」これは、2013年にワークショップを主催してくださった長野県でヒナタヤというお店を営む中村美紀さんの言葉。

「カカオの生産・輸出を通じて、自分たちの地域の豊かな森と暮らしを守りたい」と奮闘するパプアの人びとの挑戦と、日本各地で地域に根差しながら世界と向き合おうとしている方たちが、手作りチョコレートによってつながることのできるこの取り組みは、これからさらに広がっていくと確信しています。■

〔注〕一般的なフェアトレード・チョコレートは、フェアトレードのカカオを使用してヨーロッパなどでチョコレートを製造している場合が多いので、カカオの素材そのものを消費者が手にできる機会はずは多くありません。

うのは本当に幸せなことですが、裏を返せば自然がすべてを与えてくれるので、いわゆる農業の営みであるところの、種をまき、一定時期雑草をむしり、害虫を駆除し、やっとの思いで収穫し、その後また土を耕し、同じプロセスを繰り返すという「人の手を入れる作業」に慣れていないのです。カカオの樹は原生林のなかに植えられました。剪定や接ぎ木などの手入れをしないので20〜30年たった樹は大木になっています。カカオ農園という、背の低いカカオの樹がシェードツリーの下に整然と植えられた光景を連想しますが、パプアのそれは密林の中で他の樹木と混じってカカオがあるという風景です。野性のカカオと言えるのかもしれない。

欧米資本による カカオ増産の圧力

カカオを取り巻く世界的状況はこの数年で様変わりしています。中国やインドなどの新興国でのチョコレート消費が伸びカカオ需要が高まっている一方、供給サイドでは不順な天候や病気の蔓延で収量が減っていることに加え、カカ

オの出荷価格が低いため零細カカオ農民のやる気が失せ、油やシなど他の換金作物に転換しているといえます。

米国系食品大手のマース社をはじめとする欧米のチョコレート会社は「2020年にはカカオ供給量が100万トン不足する」と危機感を募らせ、この事態を回避するために、カカオ作付面積の拡大と単位面積あたりの収量増加が喫緊の課題だと訴えています。そしてパプアにも、収量を3倍に伸ばす「持続的ココア・イニシアティブ」と銘打ったカカオ増産を迫る圧力が押し寄せています。これはスラウエシ島で、企業、政府開発援助、NGOが一体となって推し進めたスキームを踏襲するもので、収量の飛躍的向上は化学肥料と農薬の使用を伴うものです。

未来を共に生きる

カカオ・キタ代表のデッキーさんは、自然のキャパシティを越える大量生産を図る農法はパプア先住民の慣習や文化にとって異質のものだと憂慮しています。収入が増えるという触れ込みに心動かされる生産者には、「カカオで大



野川未央 / のがわ・みお
APLA事務局

儲けすることを望む。カカオは自然が育む産物のひとつだという認識で、暮らしの豊かさを総合的に考えることが大切だ」と説いています。森のエコシステムを守り、有機的な栽培・加工技術を向上させることでカカオの生産性や品質を上げ、自然から授かった恵みの範囲で充足する精神を大事にする。パプアの人びとのこうした取り組み

みに共感し、応援する消費者とともに発展させるカカオの民衆交易は、大企業が主導するグローバル市場の要請に応じない道を選択し、オルタナティブな独自のシステムを生産者と消費者相互の友情と連帯で築いていく、夢のある協働作業です。「わたしたちのカカオ」を通して、皆で共に未来を生きましよう! ■

(ATJ)の商品に、新たにチョコレートが加わりました。

とはいえ、巷にはすでに沢山のフェアトレード・チョコレートが存在しており、その中で「チョコラテパプア」を改めていくには色々な工夫が必要でした。マスコバド糖をはじめとした民衆交易の商品を応援してくれている「きまぐれや」の吉田友則シェフから「素材としての魅力を知ってもらえる強みを生かしたらいい」というアドバイスをもらい、一緒に考えついたのが、パプア産のカカオ(カカオマスやココアバター)をつかって「ホンモノの手作りチョコレート」を体験してもらうワークショップです。

完成してはなくてもいい、まずは色々な意見をもろうためにやってみよう、とAPLAとして最初にワー

どんなに情勢が厳しくとも 私は人間の力を信じたい

きむきがん
劇団石(トル)主宰

私は今、辺野古のことが気になっ
て仕方ありません。毎日その
動向を追っていると、もう胸がはちき
れそうです。もちろん新基地建設のこ
とです。民主主義はどこにいつてしま
ったのでしょうか。

海が埋め立てられようとしている。
どこかコンクリートの塊が投げ込ま
れ続け、海が壊されていく。沖縄防衛
局は、米軍普天間基地の移設先として、
辺野古沿岸部に新基地を建設しようと
その工事のための作業を着々と進めて
います。本来ならば、市民を守るはず
の海上保安庁を番犬のように置いて、
抗議の声を暴力で押さえ込み、民意を
無視しています。海上では連日、カヌ
ーで抗議する市民と強制排除しようと
する海保の攻防が続く、モラルを超え
た海保の暴力により怪我をする市民が
後を経ちません。ちなみにこの新基地
建設については、沖縄県民の80%以上
が反対をしているのです。何故、国家
はそれを無視して突き進むのでしょう

か。こんな国家は、私たちが市民を誰ひ
とりとして大切にしてくれませんか。今
番犬のように操られ、やりたい放題の
暴力を働く海保職員でさえ、状況が変
わればいつでも捨てられるに決まっ
ています。そのことが今、本土に届かな
い。

先日、その辺野古に行ってきました。
広大な海に浮かぶ海上保安庁の不気味
な黒のゴムボートに強い違和感を覚え、
海上保安官のかけるサングラスがまる
でドクロのように見えました。

しかし目の前に広がる海は、沖縄が
世界に誇るサンゴの生息地であり、ジ
ュゴンがごはんを食べにくる豊かな海
です。海に入ると、その美しさたるや、
ドーンと頭を打ったような衝撃にみま
われ、美についてを知っているようで
知らなかった自分を瞬時に解り、まだ
共存してくれる大自然に圧倒されまし
た。どぶんと潜ってみると、大きな
サンゴとそこに集まる色とりどりの魚
たちに出会い、鳥にあがれば真っ白な

砂と岩でできた洞窟に出会います。洞
窟の間から差し込む光に反射して透
明に光る水の動きは、鳥肌が立つほど
神秘的な色を放ち、薄暗い岩には、水
面の光が七色のマーブルにキラキラと
映っています。もう、どうしようもな
くて涙が流れてきました。

辺野古——光を放つ自然と人びと

それなのに、基地をつくりたい人間
はこれでもかこれでもかと、ぶさいく
な欲で破壊し続けようとしているので
す。しかし辺野古には、陸ではテント
での座り込み、海ではカヌーと船で、
声をあげ、身体をはって抗議をする人
たちがいて、さまざまに熱い人間の活
力に満ちた行動がありました。そこに
加わっているのは、ごく普通の生活者



2015年1月、小学5年生のももちゃんと一緒に辺野古を訪問。

たちです。いつでも誰でもその仲間
に入れます。逆にいうと、県内外関わ
らず、全国の支援者の輪で運動が作ら
れているのです。みんな同じように大
切な日常生活をもちながら、できるこ
とをできる時にやっています。だから
誰もが活かされて輝いていました。私
は辺野古で世界に誇る自然と人たちに
出会いました。真意に生きる人たちは、
決して型にはまらず、権力に屈せず、
光を放っています。私はそれに続き
たいと思いました。

たくさんの方が普通の生活を通して
反対の声をあげ、具体的に社会を変え
る平和の粒になれるならこんな素敵な
ことはないでしょう。たとえ現場に行
かなくても、みんなが少しずつ事実を
知り、声をあげることで、戦争で金儲
けをしようとする腐った権力をぶつ
ばすのです。私はたくさんの方の心に
聞きたい。美とは何か。正義とは何か。
本当の豊かさとは何か。あなたの心の
中はどうですか。

※きむきがんさんの公演の様子や辺野古の滞在記は以下のブログをご覧ください。
劇団石(トル)きむきがんのブログ <http://blog.livedoor.jp/kigang/>

『みんなのでつくるシリア展』 に寄せて

田村佳子 / たむら・よしこ
看護師、『みんなで作るシリア展』主催

2011年3月にシリアの紛争が
始まり、今年で丸4年が経ちま
した。日本で流れるシリアのニュー
スは、日々悪化する紛争や止まらない殺
戮、国内外に溢れる難民(現在人口の半分
の1000万人が住んでいた自宅を追われている)
など希望の見えない現状ばかりです。

シリアに馴染みのない方には信じても
られないのですが、ほんの少し前まで
シリアの人びとはごく普通に幸せに暮
らしていました。私がシリアの首都で
あるダマスカスに留学していた200
9~2010年当時、シリアは中東で
一番平和で安全な国でした。スーツケ
ースを抱え、知り合いもいないなか一
人でシリアに降り立ち、ホテル暮らし
から始まった留学生活は、周りのシリ
ア人に助けられながら、たくさんの愛
情をもらいました。道に迷ってキョロ
キョロしていると、いつも近くにいる
人が一緒に地図を見ながら送り届けて
くれました。学校からホテルに帰ると、
毎日従業員たちが宿題を一緒に手伝っ



シリア隣国のイラクとヨルダンに避難しているシリア難民に対して実施した保健活動の様子。

てくれ、食事に誘ってくれました。ア
パート暮らしになってからは、隣人が
毎日お茶や食事に誘ってくれて、なか
なか部屋へ戻れないほどでした。都市
部だけでなく、田舎で暮らすシリアの
人びとも、訪れた先で親切にしてくれ
ました。日帰り旅行で訪れた町や村で
は見ず知らずの外国人(私)を笑顔で家
の中へ招き入れ、精一杯もてなしてく
れました。

世界遺産にも登録されているダマス
カス旧市街の街並は美しく、ジャスマ
ン、アーモンド……四季折々の花が咲

き乱れます。中東は砂漠のイメージが
強いですが、シリアは肥沃な土地で野
菜や果物がたっぷり穫れる豊かな国。
いちばにはいつも季節の野菜が並んで
いました。シリアの人びとは、いわゆ
る「裕福」な生活を送っていたわけ
ではないのかもしれませんが、「お金や
物がなくても、まわりの家族や友達
いつも笑顔だったらそれで充分だよ」
そう言って幸せに暮らしていました。

家族の絆はとても強く、私のことも娘
のように接してくれました。彼らから、
そういったお金では買えない大切なこ
とをたくさん学びました。今、こうし
てシリアでの生活を振り返り、今の紛
争下での彼らの苛酷な環境を思うと胸
が締め付けられる思いです。彼らのこ
とが気になるなかで、シリアのために
私が日本でもできることはないか……
そう考え、2012年秋よりスタート
させたのが『みんなで作るシリア展』
です。これはお世話になったシリアの
方々へのせめてもの恩返しだと思っ
ています。

シリアの平和を願う

私1人でなく、シリアに住んでいた
人、シリアを旅行した人、シリアの支
援活動をしている人たちの声も集めた
いと思っけて声をかけ、現在では47人

※『みんなで作るシリア展』の詳細は以下のfacebookページをご覧ください。
<http://www.facebook.com/shiriaten>

03

口口サエの歌が聴こえる 04

Ego Lemosの世界

野川未央 / のがわ・みお
APLA事務局

BALIBO

1975年10月16日、西ティモール(インドネシア)との国境に近いBaliboという町で、欧米人の5人の青年が殺害された。5人は、インドネシア軍による東ティモール侵攻の取材のためにオーストラリアのテレビ局が派遣した記者たち。インドネシア軍の部隊が射殺したという目撃者の証言などにも関わらず、インドネシア政府は「5人は銃撃戦に巻き込まれて死亡した」と主張し、豪政府もインドネシア政府との関係性を重視してその主張を受け入れ、真相は闇に葬られた。その事件を元にして2009年にオーストラリアで制作されたのが『Balibo』という映画だ。

その主題歌「Balibo」についてエゴはこう語っている。「映画のために作詞作曲を頼まれて、事件について知るために資料を読んだ時にこう思ったんだ。これはバリボで亡くなった5人だけの話ではない、リスクを冒してでも世界に対して事実を伝えようとするすべてのジャーナリストの話だ。だから歌詞の中で個人名や国を特定しなかったんだ。」

その後、12月7日にインドネシア軍による首都ティリ

への全面侵攻が開始され、24年間にわたる軍事占領下で20万人近い人が亡くなった東ティモール。それを黙認しつつけた国際社会。私たちは、いつまで同じ過ちを繰り返すのだろう。



映画『Balibo』公式サイトより

Balibo..O..Ho, Balibo..Ho
Rai ida do...ok husi hau nia rain
Hau lao hau nia servisu,
Tuir dalam ne'ebe los
Hodi buka buat los,
Liberdade hodi hatete los
Maibe! Fakar hau nia ran,
Hau isin sai malirin!
Huh...huh...ahh...ahh...,
Do'ok husi hau nia rain

バリボ...バリボ...
我が故郷から遠く離れた場所
自分の使命を果たす、
正しい道に従って真実を探し、
その真実を伝える自由のために
しかし!
わたしの血は流れ、
身体は冷たくなっていく!
Huh...huh...ahh...ahh...
我が故郷から遠く離れて (訳:野川未央)

04

美味しいマンガ

04

『あさめしまえ』
北駒生(著)、講談社(発売)

安藤丈将 / あんどう・たけまさ
武蔵大学教員



連載4回目は、北駒生著『あさめしまえ』を紹介します。このマンガは、朝ごはんを提供する「アサメシマエ」という食堂が舞台です。主人公の日高元は、自分が中学生の時、母親に出でいかれ、高校を卒業して調理師学校に通うまで、この小さな食堂に毎朝通いました。元ちゃんは、食堂の店主が亡くなった後、働いていたイタリ안의厨房を辞め、店主の一人娘の許可を得て、「アサメシマエ」を一人で切り盛りしています。食堂には、日々、訳ありのお客さんがやってきます。子育てに疲れたシングルマザー、子どもに疎まれる母親、妻に逃げられた会社員、仕事ばかりの生活に行き詰まった女性、家族の食事を一手に担う高校生など。彼らは、元ちゃんの出す和洋中のバラエティに富んだ温かい朝食を食べ、昨日までのいろいろなことを仕切り直し、新しい一日のスタートを切っています。

料理のちから
この作品は、「料理のちから」について考えさせてくれます。「料理のちから」を元ちゃんから教わった一人が、父親が借金を抱え、母親が入院中の高校生の男子です。「アサメシマエ」の近所に住む彼は、弟と妹に満足な朝食を作ることができず、きょうだいの口ぐせは、「ハラへった」です。しかし、毎朝「アサメシマエ」に来て食事をすると、元ちゃんは、このきょうだいにフレンチトーストの作り方を教えます。安い食パンも火を通すだけでぐつと美味しくなり、ほんのちよつとした工夫と手間が彼らの心を満たすのです。余裕のない暮らしを送るなか、手の込んだ料理を作ってもらったり、学んだりするチャンスがなく、精神的にも追い込まれてしまう貧困家庭の子どもたち。経済的な貧しさだけでなく、貧困家庭の子どもに料理と食事を共にする場を提供するNPOの活動についてのニュースも耳にします。こうした状況のなか、町の人びとにレシピやコツを教え、「料理のちから」を与える元ちゃん。自分の地域にも「アサメシマエ」を、そんなことを考えさせられる作品です。

01

カカオ・キタ kakao kita

カカオ民衆交易奮闘記

10

津留歴史 / つる・あきこ
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員



デムタ湾をのぞむ。

今回は「カカオ・キタ」が昨年から買付けを始めた産地について紹介したい。ジャヤプラ島の北海岸沿い、州都ジャヤプラから西方向に車で3時間程の距離に位置するデムタという地域だ。ここは湾を囲むように、4つの村が寄り添っている。太平洋に広がる青い海と濃い緑の森を後ろに控えた、一見するとパプアではありふれた漁村の風景だ。ただひとつだけ、デムタには普通ではない光景がある。それはこの小さな漁村が木材やパームオイルの積出港であることだ。1980年代、このあたりでは森林伐採が盛んであった。住民は自分たちの森から切り出される木が、この辺鄙な湾から密かに大型船に積み込まれていく光景を目の当たりにして心が痛んだ。理不尽だと思いつつ

抗議、時にはトラックが通る道を封鎖した。その結果デムタ地域は、反インドネシア、独立派の巣窟というレッテルを貼られ、当局の弾圧を受け、少なからず犠牲者を出した。「カカオ・キタ」代表のデッキーさんは小さな民が軍や伐採企業を相手に正面から立ち向かうことを心配した。そこでデッキーさんはデムタ出身の友人ヨセフさんに「村に帰って住民と一緒にカカオで頑張れ。経済的に自立することも立派な闘いだ」と説得した。それから十数年、「カカオ・キタ」の事業を通じてデッキーさんとヨセフさんが再び出会った。久々に訪れたデムタで人びとは海で魚を獲り、森でカカオを育て自分たちの土地の上でしっかりと生きていた。ヨセフさんはカカオを通じて外の世界とつながることが人びとに希望を与えているという。村人はいつも「カカオ・キタ」の買付けを楽しみに待っていてくれる。パームオイルの積出港となった湾では、オイルを運ぶトラックが埃っぽい道を地響きをたてて行き交っている。その横を森からカカオ豆を収穫してきた人びとがゆっくりに歩いていく。状況は何も変わっていないのか、または変わっているのか。いずれにせよ、人びとはそこで生きていく。

デムタの森から世界とつながる

02

マニラ・ジープニー通勤 4

小川二美子 / おがわ・ふみこ
マニラ在住、会社員

ジープニーの中の小さな親切

帰宅時のジープニーはギッチリ満員。渋滞にはまった時など、車内はむんむん暑く、汗が噴出します。そんな状況のなか、2歳くらいの子どもをひざに乗せた女性がいました。最初は車窓の風景を楽しんでいた子どもですが、身動きのできない息苦しさや、湿度や高温に耐えかねて泣き出しました。親は大変。日本なら周りに気を使って、必死で泣き止むようにあやしますが、フィリピンは、あくまでも子どもがかわいそうなので、泣き止ませようとはしませんし、子どももガマンしません。

だんだん声が高く、大きくなっていきました。と、そのとき、一人のオジサンが、カバンから読み終わった新聞紙を出し、母親に手渡しました。母親はちょっと意味がわからなかったみたいでした。私もわかりませんでした。

「バマイバイ ナラン(うちわだよ)」と言ったので納得。母親は一生懸命、新聞で子どもをあおぎ始めました。すると、ほんとうにピツパリ泣き止んだのです。

ジープニーの車内の小さな親切を毎日のように見かけます。運賃を人から手に手渡して運転手に払うことは、よく



知られていますが、雨が降り出せば、みんなで協力して丸まったビニールシートを降ろしたり、他人の子どもを自分のひざに抱っこしてあげたり、乗ってきた人の大きな荷物を、乗客がリレーで奥に収めたり、最後に乗り込んだ女性に席がなかったら、近くの若者が「ウボ カ ナ(座って)」と自分の席を譲って、自分はサベット(ぶらさがり)したりします。一台のジープニーの乗客は、まるで同じコミュニティーの住人のようなんです。

APLA 食堂

Kitchen APLA

08

今日の
レシピ
ふるふる
コーヒーゼリー

レポーター
大久保ふみ / おおほ・ふみ
APLA事務局
廣瀬康代 / ひろせ・やすよ
APLA理事

APLA食堂では、ATJ/APLAで扱っている食材を利用したレシピをご紹介します。手の込んだ料理も素敵ですが、もっと手軽に使っていただけるように、“誰でも簡単に作れる”レシピをお届けします。

ふるふるコーヒーゼリー

【材料 (グラス2杯分)】

- インスタントコーヒー カフェインレス 大さじ2~3
- ゼラチン 10g
- お湯 300cc ~ 400cc
- 牛乳または豆乳 お好みの量
- マスコパド糖黒みつ 大さじ1

【作り方】

1. 鍋にお湯を入れて、インスタントコーヒーを煮溶かす。少し冷めてからゼラチンを振り入れ溶かし、あら熱をとる。
※ゼラチンによって、予めふやかす必要があるものは一番最初に作業をしてください。
2. 1.を好きなグラスの半分ぐらいまで入れ、氷水を入れたバットで周りが少し固まるまで冷やしてから冷蔵庫で固める。後ほど牛乳を入れるのでゼリー液の入れ過ぎには注意する。
3. 冷やし固まったら牛乳をたっぷり入れて、ストローで適当な大きさに崩す。ゼリーの硬さは好みによって加減する。甘みがほしい方は牛乳と一緒に黒みつを入れてどうぞ。

☆リキッドコーヒーを使ってもOK! ☆
使うときは、50度くらいに温めてゼラチンを溶かしてください。

これからの季節におすすめ
簡単! おうちカフェ



今回の雑学

目 覚ましにシャキッとしたい、勉強を頑張りたいなど、集中したい時、休憩やリラックスしたい時、コーヒーはそんな相反するどちらの場合も飲める不思議な飲みもの。

現在コーヒーの流行となっている「シングルオリジン」という言葉を聞いたことはありますか? 同じ生産国でも複数の農園で生産されている豆をブレンドして「〇〇産」と国単位の銘柄を付けるのではなく、限定された地域と単一種のコーヒー豆だけを使用したコーヒーです。「〇〇農園産」というように、いつ、誰が、どこで作ったかが分かるもの。そしてその豆の個性を存分に味わうことが「サードウェーブ(第3の波)」として注目されています。

明治末期に日本で広まったコーヒーは、コーヒーそのものを楽しむというより「喫茶店でおしゃべりをしながら飲む」というシチュエーション自体を楽しむものだったそう。今はサードウェーブのようなこだわりがある一方で、コンビニで100円で手軽に買えるコーヒーが定着しつつあるなど、楽しみ方や飲み方はどんどん多様になっていきますね。

参考: 日経トレンドネット
<http://trendy.nikkeibp.co.jp/article/pickup/20130405/1048556/7ST-life&P=2>

自慢
する人

石岡真由海 / いしおか・まゆみ
グラフィックデザイナー

4人のお子さんと4匹の犬と共に50頭ほどの豚を飼育している。



広 島県三原市の山の上に、桜の山農場があります。ここは坂本耕太郎さんがお連れ合いの梨恵子さんと営む循環型養豚農場で、豚肉のほかに農薬や化学肥料を使わずに育てたお米を消費者に直接販売しています。桜の山農場の養豚は未利用資源、つまり売れ残りや加工の途中で出る原材料の切れ端や余りなど、「まだ食べられるけど捨てられてしまうもの」で育てているのが特徴です。昆虫パウダー、鰹節粉、醤油の搾りかす、おから、豆腐、パン、麺、餃子

わたしの友産友消じまん 04

開花を待つ農場のシンボルツリーの八重桜。この木の下で多くの人交流している。



桜の山農場の巻
の皮...、ミネラル分もたっぷりの餌を近隣の食品会社などから回収しています。現在の姿を描いたのは高校2年生の時。坂本さんは、経済について最近新たな気づきが続いていると言います。「できたものをみんなで分け合えるのが百姓の醍醐味。ここにいる子どもと向き合い食べものを作り、食べる、生きるという『生き物に与えられた幸せ』を感じる。今後どれだけ経済活動から自由になれるか、お金を使わない生き方を前進させたい。また、美味しい豚肉は違

う生き方をめざす人とも「美味しい!」だけでつながることができる。最近始めたオープン農場の取り組みと共に、桜の山農場を見て、食べて、感じてもらうことで、食に根ざした生き方を感じてもらいたい」と耕太郎さん。お金の困り方を解決することをハッとさせてくれる空間が桜の山に満ちているのは、耕太郎さん家族の生き方すべてにこの思いが詰まっているからなのでしょう。



親豚の放牧地で耕太郎さんと梨恵子さん。

桜の山農場

ブログ: <http://ameblo.jp/sakuranoyama/>

編集後記

APLA設立から8年、ハリーナも28号目を迎えた。あらためて、28冊分をずらりと並べてみると、毎号表紙を飾る伝統織物の絵が実に圧巻だ。特集記事の内容は号数より表紙の絵で覚えていることに気づかされる。APLAに集う人びとが、思い出の布を毎号紹介して下さる「表紙のこぼし」は、ハリーナの紙面では一番小さなコーナーだが、私はここが一番好きだ。旅先で出会った織物とそこに生きる人びとの暮らしを、毎号楽しく想像させてもらっている。読者の皆さま、もしお手元に思い出のある織物があれば、ぜひ紹介してくださいね。(大橋)

カカオの話題が満載の今号。5月なのにチョコレート!と言いたくなる気持ちを抑えて……日本でのチョコのシーズンは秋冬となっておりますが、産地のパプアでは、年に2回収穫のピークがあり、5月は一回目のピークが終わる頃だそう。今特集で、パプアからの想いが皆さんに届いたらうれしいです。(吉澤)

TOPICSに寄稿してくださったきむきがんさんは昨年9月に辺野古で知り合いました。今回の写真と一緒に写っているのももちゃんとの辺野古滞在を綴ったブログから、一部を引用します。
「自分のおこづかいとお年玉をなんとか工面してやってきたもこの話をきいて、何人かの方がお年玉をくださった。お孫さんにももちゃんの話をする、そのお孫さんが自分の分を少しももちゃんにカンパしてくれるということもあった。(中略)この千円、二千円の重みを深く愛し、学び、大枚はたいて人殺しの武器をつくらうとする歪んだ日本経済にNO!をいえる大人になってほしいと思う。」きがんさんのブログ、ぜひ沢山の方に読んでいただきたいです。(野川)

ハリーナ HALINA

2015年5月号 vol.02-no.28
2015年5月1日発行

編集長
大橋成子

編集者
吉澤真満子、野川未央

表紙写真
長倉徳生

デザイン・制作
十年舎

編集・発行
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)

〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

印刷
株式会社セイズ

【事務局だより】

事務局の動き (2015年2月～4月)	
2月 1日	生活クラブ埼玉飯能支部主催「カンタ!ティモール」上映会に、野川がトークゲストで参加しました。
2月 2日	アーユス仏教国際協力ネットワークの第2回NGO新人賞を野川が受賞しました。
2月 3日	学芸大学附属高校の授業でAPLAの活動について野川が講義しました。
2月 3日	パルシステム埼玉平和募金贈呈式に大久保が出席しました。
2月 5日	東京都国分寺市(カフェスロー)にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
2月 6日	羽村市立栄小学校にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
2月 7日、8日	福井県福井市(渡辺イングリッシュスクール)にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
2月 11日～22日	東ティモールに野川が出張しました。
2月 14日	パルシステム東京ピースフェスタに参加しました。
2月 15日	東京朝市・アースティマーケットに、「P to P Café」として出店しました。
2月 19日	パルシステム東京主催「ハルワゴン」に参加しました。
2月 21日	草の根市民基金・ぐらん「草の根助成」公開選考会に参加しました。
2月 28日	理事会・評議員会を開催しました。
3月 1日	「大地を守る会のオーガニックフェスタ」にチョコレートアライアンスのメンバーとして参加しました。
3月 8日	東京都板橋区(cosh)にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
3月 12日	第10回BMW基礎セミナーに吉澤が参加しました。
3月 17日、18日	八王子市立宇津木台小学校にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
3月 20日	埼玉県日高市(高麗川南公民館)にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
3月 21日	日本平和学会関東地区研究会・恵泉女学大学平和文化研究所・花と平和のミュージアム共同企画「『小さな民』からODAの軍事化を考える」に物品販売で参加しました。
3月 29日	東京朝市・アースティマーケットに、「P to P Café」として出店しました。
3月 31日	大地を守る会にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
4月 5日	第2回ロータス寺市に出店しました。
4月 16日	2014年アジア生協協力基金事業成果報告会に野川が参加しました。
4月 17日～24日	東ティモールに野川が出張しました。
4月 18日、19日	アースティ東京2015にATJと共同で出店しました。
4月 25日	理事会・評議員会を開催しました。
4月 26日	東京朝市・アースティマーケットに、「P to P Café」として出店しました。

事務局からお知らせ

以下の呼びかけに賛同・参加しました。
●「いのちの海とサンゴ礁を守れ」辺野古新基地建設に反対するNGO緊急共同声明～辺野古新基地に反対、作業の中断を～

パレスチナ・ガザへの緊急支援へのご協力、ありがとうございました。
2014年7月に発生しましたイスラエルによるガザ攻撃の被災者への支援をありがとうございました。募金は半額ずつオリブオイルの出荷団体であるPARC(パレスチナ農業復興委員会)とUAWC(パレスチナ農業開発センター)へ送金しました。
●募金総額 : 5,105,330円
●送金額合計 : 4,594,798円
*第1回目送金(2014年11月) : 2,687,432円
*第2回目送金(2015年3月) : 1,907,366円
●APLA手数料計: 510,532円

2015年4月より新しいスタッフが加わりました。
2014年度にフィリピン・ネグロス島にてインターンとして働いていた寺田俊さんが2015年度より事務局スタッフとして働くことになりました。APLA初の男性事務局スタッフです。よろしくお願ひします。

お知らせ (台風ヨランダ、ASINへの支援金に関して)
2013年11月に発生したフィリピン・台風ヨランダの緊急支援ですが、募金総額43,419,596円の内、20,000,000円がASINへの支援額でした。すでに12,324,010円を送金済みですが、ASINはネットワークで活動しているため、メンバー団体がそれぞれ人材や資源を持出して活動していることや、家屋再建の活動が進んでいないことから(詳細P14参照)、送金済みの支援金もまだ全額は使用されていません。未送金の残金の7,675,990円の取り扱いに関してAPLA理事会で検討し、以下のように決定いたしました。何卒ご了承ください。
●未送金の7,675,990円は、今後「フィリピンで発生しうる自然災害」への緊急支援金として、APLAが責任を持って管理する。
●ただし、今後ASINの活動の中で必要な経費が発生した場合には、追加で送金する。

From East Timor [東ティモールより]

地域の水源を守る

エルメラ県のコーヒー生産者グループGATAMIR(ガタミル)で2013年末に実施した水源保全のための活動(ハリーナ23号を参照)。今年度は、同じエルメラ県でも別のコーヒー生産者グループFitun(Carano) (フィトン・カイト)の地域で同様の活動を実施しました。昨年度GATAMIRでの活動に参



最終日、整備した水源の周囲や上方の傾斜地にみんなで植樹。

加したFitun(Carano)のメンバーが「次は自分たちの地域で!」と意欲的に準備を進めてきました。前回同様、グループのメンバーだけでなく、子どもから大人まで地域の沢山のの人たち、そして「この実践から自分たちも学びたい!」とほるる別の県からやってきたコミュニティのリーダーたちなど、合計で100人近い参加者が、エゴ・レモスさんの指導の下で作業を進めました。

泥地の中から水が湧き、流れ出ていただけの「水源」を石できれいに整備して泉をつくり、その下方にため池を掘り、周囲に植樹をする、という大掛かりな作業。さらに、雨季のため強い雨に降られることもたびたびありましたが、意欲的にそして楽

From Philippines [フィリピンより]

台風ヨランダ支援から1年が経って

2013年11月に台風30号(フィリピン名ヨランダ)がフィリピンを襲い甚大な被害をもたらしました。皆さまから集まった支援

金は、オルター・トレード社(ATC)と、ネグロス島で活動するNGOや教会団体などのネットワークASIN(アシン / Alternative Solidarity Initiative Network)の略)による支援活動のために送金しました。ATCは、被災したバナナ生産者への緊急救援として、ネグロス島、バナイ島、ポホール島にて、食糧・生活物資の配布を実施しました。また、復興支援として、バナナの苗・肥料・農機器具・野菜の種の配布、農業用水施設の設置(ハ

しみながら作業に参加する人たちの姿が印象的でした。終了後には、「大きな学びがあった」「大変な作業もみんなで行うと楽しい」「自分の地域でも同様の活動を実施

したい」と言った肯定的なコメントが数多く寄せられています。また最終日のクロージングの儀式では、「これは地域の宝。大変誇りに思う。この宝を生かすのも腐らせてし

ナイ島(ネグロス島)、太陽光による貯水システムの設置(バナイ島などを実施しています)。バナナ生産者への支援以外にも、ネグロス島北端に位置するオールド・サガイの漁民に対して生計手段である小型ボート30艘と魚の燻製加工場建設を支援しました。ASINでは、ネグロス島の北に位置するマンバカヤウ島という離島への支援に入り、緊急物資の配給や被災者のトラウマ対策としてのワークショップを開催しました。また、災害対策について分かりやすく理解できるコミックも製作しました。カデイス市内では、家屋再建や修繕を何件か実施しましたが、条例で「危険地帯」に指定された被災者の再定住地を行政が指定しないことから、家屋建設を支援した



給食プログラムを実施するASINメンバー。

くてもできない状況が続いています。また、カデイス市内で実施した子どもたちへの給食プログラムは、2015年2月まで約1年間実施し、子どもたちの健康状況の改善が見られたため、活動は終了しています。今後は、生計プログラムのサポートや将来起こりうる災害に備えた支援体制の整備などを進めます。(APLA事務局長・吉澤真満子)

まうのもメンバー次第。協力してメンテナンスをして、未